

福音のヒント 年間第 11 主日 (2018/6/17 マルコ 4 章 26-34 節)

教会暦と聖書の流れ

マルコ福音書では、この 4 章にイエスの語ったさまざまなたとえ話が集められています。4 章 1-2 節にはこう始まっていました。「イエスは、再び湖のほとりで教え始められた。おびただしい群衆が、そばに集まって来た。そこで、イエスは舟に乗って腰を下ろし、湖の上におられたが、群衆は皆、湖畔にいた。イエスはたとえでいろいろと教えられ、その中で次のように言われた。…」(1-2 節)。こうして「種まく人」のたとえ話が語られますが、10 節には、「イエスがひとりになられたとき、十二人と、イエスの周りにいた人たちが、たとえについて尋ねた。そこで、イエスは言われた。」とあり、その後、きょうの箇所まで場面や話の相手は変わっていないような印象があります。

福音のヒント

(1) しかし、マルコ 4 章の伝える状況が、イエスがこのたとえ話を語った本来の状況だったとは考えにくいものがあります。むしろ、いろいろな場面、いろいろな状況で語られたイエスのたとえ話が、その本来の状況から切り離されて、たとえ話だけで独立して伝えられてきて、それがこのマルコ 4 章の「たとえ話集」のように集められたのだと考えられるでしょう。ですから、マルコ 4 章では群衆や弟子たちに向けて語られた一般的な教えのようにしているものも、本来はそうではなかったのかもしれませんが。



ヨアキム・エレミアス(1900-1979)という聖書学者は、イエスのたとえ話は本来すべて「福音の弁明」であると考えました(A 年年間第 15 主日の「福音のヒント」参照)。イエスのたとえ話は抽象的、一般的な教えを述べるためではなく、ある特定の状況の中で、イエスに対する批判や疑問に答えるために語られたというのです。イエスに対する批判に答えるためにたとえ話が語られた典型的な例としては、有名なルカ福音書 15 章があります。「徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、『この人は罪人(つみびと)たちを迎えて、食事まで一緒にしている』と不平を言いだした。そこで、イエスは次のたとえを話された」(1-3 節)。こうしてイエスは「見失った羊」「無くした銀貨」「放蕩息子」という 3 つのたとえ話を語りまします。これらのたとえ話は、イエスがご自分の行動の意味を解き明かし、何が神のみ旨にかなうことであるかとはっきりと示すためのものです。

(2) 今日のたとえ話は、一般論として神の国が最初は小さいが、いつか大きくなるということを教えているのでしょうか。むしろここにもイエスに対する批判や疑問が背景としてあったと考えてはどうでしょうか。

イエスのメッセージの核心は、「時は満ち、神の国は近づいた」というものでした(マルコ 1 章 15 節)。それは言葉を代えて言えば、「神は沈黙を破り、ご自分の民を救うため

に、今、決定的な何かをなさろうとしておられる」というメッセージであり、当時の人々にしてみれば、ローマ帝国の支配を打ち破り、イスラエルに自由と解放をもたらすというような、政治的・軍事的なメッセージに聞こえたことでしょう。しかし、現実にはイエスの周りで起こっていたことは、病人や悪霊に取りつかれている人がいやされ、貧しく無学な人々がイエスの弟子になっていくということでした。イエスの周りには多くの人が集まってきましたが、それはマタイ福音書の表現を借りるならば「いろいろな病気や苦しみに悩む者」(マタイ 4 章 24 節)の群れでした。マルコでも「イエスが多くの病人をいやされたので、病気に悩む人たちが皆、イエスに触れようとして、そばに押し寄せた」(3 章 10 節)とあります。イエスのもとに集まった人々はほとんど病人とその家族のようでもあります。そして、イエスはこの人々を指して、「見なさい、ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる」(3 章 34 節)と宣言されたのです。

(3) 周囲の人々から、この様子はどう見られたのでしょうか？ 神の国のために戦う戦士になろうと考えていた「熱心党のシモン」(マルコ 3 章 18 節)のような弟子たちはこの現実をどのように見たのでしょうか？ 多くの人々から見ればイエスの周りで起こっていることはあまりにも小さく、弱々しい人の群れでしかなく、神の国からほど遠いものだったのではないのでしょうか。そんな中でイエスが今日のたとえ話を語ったとすれば、それはどういう意味を持ったのでしょうか。

「確かに神の国と言っても今は吹けば飛ぶような小さな現実にはしか見えないかもしれない。しかしそれは種なのだ。種が本物で生きていれば、いつかそれは必ず大きなものへの成長していき、大きな実りがもたらされる」 イエスは神の国のメッセージに対する疑問にこのようなたとえ話をういて答えたのではないのでしょうか。

28 節「ひとりでに」はギリシア語で「アウトマトス *automatos*」という形容詞で、英語の「オートマチック *automatic*」の語源です。「からし種」は、種は直径 1,2 ミリの小さなものですが、成長すると 2~3 メートルにもなる植物です(表の写真参照)。もちろんこの驚くべき成長をもたらすものは神ご自身の力なのです。

(4) 「たとえ話」は常識的には、物事を分かりやすく伝えるために語られるはずで、イエスのたとえ話も本来、それを聞いている人に分かりやすいものだったはずです。しかし 34 節では、たとえ話には特別な説明が必要であるかのように言われています。11-12 節にもこうありました。「あなたがたには神の国の秘密が打ち明けられているが、外の人々には、すべてがたとえで示される。それは、『彼らが見るには見るが、認めず、聞くには聞くが、理解できず、こうして、立ち帰って赦(ゆる)されることがない』ようになるためである。」もし福音書のたとえ話が分かにくいとするならば、上に述べたように、本来語られた状況が消えてしまい、たとえ話だけが伝えられたことによるのではないのでしょうか。

たとえ話を読むとは、イエスのたとえ話を今のわたしたちの現実の中に置き直してみることもあります。わたしたちの現実の中で、みすぼらしく、弱々しく、こんなのでは何にもならないと思われるような現実があるとき、それでもそこに神の国の「種」を見ていくことができるならば、わたしたちの現実に対する見方は変わっていくはずで